

(23) サヤインゲン
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
				菌 核 病	白 絹 病	炭 疽 病	灰 色 か び 病				
アフェットフロアブル	ベンチレラト	アミト	7	未マ			未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビルリン	11	◎			◎				
カナメフロアブル	インピルフルキサム	その他	7	未マ			未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
カンタスドライフロアブル	ボスカト	アミト	7	◎			◎				
スクレアフロアブル	マンデストロビン	ストロビルリン	11	未マ		未マ	未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
セイビアーフロアブル20	フルジキサゾール	その他	12	◎			◎				
タチガレン液剤	ヒドロキシイソキサゾール	その他	32		◎						
ニマイバー水和剤	ジエトフェンカルブ・ベノミル	混合剤	10・1	◎		◎	◎				
ハーモメイト水溶剤	炭酸水素ナトリウム	無機殺菌	NC				野				野:【野菜類登録】
パレード20フロアブル	ピラジフルミト	その他	7	未マ			未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
ベンレート水和剤	ベノミル	ベンゾイミダゾール	1	◎							

(23) サヤインゲン
ア 殺菌剤

農 薬 名	成 分 名	系 統 名	FRAC コード	適 用 病 害 虫 名							注 意 事 項
				菌 核 病	白 絹 病	炭 疽 病	灰 色 か び 病				
アフェットフロアブル	ベンチレラト	アミト	7	未マ			未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
アミスター20フロアブル	アゾキシストロビン	ストロビルリン	11	◎			◎				
カナメフロアブル	インピルフルキサム	その他	7	未マ			未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
カンタスドライフロアブル	ホスカリト	アミト	7	◎			◎				
スクレアフロアブル	マンデストロビン	ストロビルリン	11	未マ		未マ	未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
セイビアーフロアブル20	フルジキサゾール	その他	12	◎			◎				
タチガレン液剤	ヒドロキシイソキサゾール	その他	32		◎						
ニマイバー水和剤	ジエトフェンカルブ・ベノミル	混合剤	10・1	◎		◎	◎				
ハーモメイト水溶剤	炭酸水素ナトリウム	無機殺菌	NC				野				野:【野菜類登録】
パレード20フロアブル	ピラジフルミト	その他	7	未マ			未マ				未マ:【豆類(未成熟)登録】
ベンレート水和剤	ベノミル	ベンゾイミダゾール	1	◎							

(23) サヤインゲン
ウ 土壤消毒剤

農 薬 名	成 分 名	RAC コード I:殺虫 F:殺菌	適 用 病 害 虫 名										注 意 事 項
			ケ ラ	ネ キ リ ム シ 類	ハ リ ガ ネ ム シ 類	コ ガ ネ ム シ 類 幼 虫	セ ン チ ユ ウ 類	ネ コ ブ セ ン チ ユ ウ 類	ネ グ サ レ セ ン チ ユ ウ 類	白 絹 病	立 枯 病	根 腐 病	
ガ ス タ ー ド 微 粒 剤 バ ス ア ミ ド 微 粒 剤	ダゾメット	I:8F							◎			◎	
ク ロ ー ル ピ ク リ ン	コロルピクリン	I:8B	◎	◎	◎		◎		◎	◎	◎		
ク ロ ピ ク 8 0 ド ジ ョ ウ ピ ク リ ン ド ロ ク ロ ー ル	コロルピクリン	I:8B		◎	◎		◎		◎	◎			
ク ロ ル ピ ク リ ン 錠 剤	コロルピクリン	I:8B					◎		◎	◎			
テ ロ ン D C 油 剤 D	D-D	I:8A				◎		◎	◎				

注) 苗立枯病の対象病原菌の表記 R:Rhizoctonia

エ 病害虫防除法（サヤインゲン）

（ア）かさ枯病・葉焼病 *Pseudomonas syringae* pv. *phaseolicola* *Xanthomonas campestris* pv. *phaseoli*

（防除のねらい）

病原細菌は被害茎葉で越冬する。かさ枯病菌は低率ではあるが種子でも伝染する。茎葉や莢を侵す。わい性種に発病が多い。6～7月ごろから盛夏に発生し、暴風雨後にまん延する。

（耕種的防除法）

- （1）健全種子を使用する。
- （2）密植を避ける。
- （3）遅播きする。
- （4）連作を避け、排水をよくする。

（イ）菌核病 *Sclerotinia sclerotiorum*

（防除のねらい）

被害部に形成された菌核が土中に落ちて翌年の伝染源となる。多くの作物に寄生するが、マメ類の連作は発生しやすくなる。土中に菌核を残さないように努める。収穫後も莢の被害が目立つてくるので選別を徹底し除去する。

（耕種的防除法）

- （1）発病株は早めに抜き取り、収穫後の茎葉は集めて処分する。
- （2）過繁茂にならないように栽培する。
- （3）マルチ栽培をする。

（ウ）白絹病 *Sclerotium rolfsii*

（防除のねらい）

菌核の形で土壌中で越冬し、翌年これから菌糸を生じて、地際の茎に侵入する。多犯性であるが、イネ科にはほとんど寄生しないのでこれらと輪作する。

（耕種的防除法）

- （1）発生ほ場ではイネ科作物を3～4年間栽培する。
- （2）病株は早めに抜き取り、収穫後の残渣は持ち出す。

（エ）炭疽病 *Colletotrichum lindemuthianum*

（防除のねらい）

主に菌糸の形で種子に着いて伝染源となり、また、菌糸や胞子の形で罹病植物とともに残る。降雨によって発生は増大するので、ハウス、トンネル栽培では少ない。

（耕種的防除法）

- （1）抵抗性品種を栽培する。
- （2）発病株は早期に除去し、収穫後には罹病植物を除去して処分する。
- （3）肥料切れをさせない。
- （4）連作を避ける。

（オ）さび病 *Uromyces phaseoli* var. *phaseoli*

（防除のねらい）

病原菌は主として夏胞子の形で越冬し伝染源となる。つる性種に発生が多い。輪作をするとともに発生初期から薬剤散布を行う。

（耕種的防除法）

- （1）連作を避ける。
- （2）罹病植物は集めて処分する。

(カ) 灰色かび病 *Botrytis cinerea*

(防除のねらい)

菌核あるいは被害残渣などで越冬し、翌年これより生じた分生胞子の空気飛散によって伝染する。花、葉、莢に発病する。ハウス栽培での発生が多い。湿度低下に努め、発病初期に薬剤散布する。

(耕種的防除法)

- (1) 換気をよくする。
- (2) マルチ栽培をする。

(キ) 角斑病 *Phaeoisariopsis griseola*

(防除のねらい)

病原菌は菌糸や胞子の形で種子や被害部に着いて残り、伝染源となるので、種子消毒や茎葉の処分が大切である。わい性種の方が発生しやすい。

(耕種的防除法)

- (1) 抵抗性品種を選ぶ。
- (2) 健全株から採取する。
- (3) 連作を避け、排水をよくする。
- (4) 収穫後はすみやかに処分する。

(ク) モザイク病 BCMV, BYMV, CIYMV

(防除のねらい)

インゲンモザイクウイルス (BCMV) は種子伝染する。クローバー葉脈黄化ウイルス (CIYMV) は「つる枯病」を起こす。CIYMV とインゲン黄斑モザイクウイルス (BYMV) は種子伝染しない。3つのウイルスとも汁液伝染し、また、アブラムシも媒介するので、アブラムシ対策が重要である。

(耕種的防除法)

- (1) 発病株の早期除去に努める。
- (2) シルバーマルチ等によってアブラムシの寄生を回避する。

(化学的防除法の注意事項)

アブラムシ類の項参照

(ケ) コナジラミ類

(防除のねらい)

すす病の発生による汚れが問題となる。また、タバココナジラミによって白化莢が発生し、品質低下を招く。多発すると防除が困難なので、粒剤等も活用しながら発生初期の防除に努める。キュウリのオンシツコナジラミの項、トマトのタバココナジラミの項参照。

(耕種的防除法)

- (1) 寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。
- (2) 施設では黄色粘着資材等を利用し、成虫を誘殺する。

(コ) アブラムシ類

(防除のねらい)

生育初期の吸汁害やウイルス病の媒介が問題となるので発生初期の防除に努める。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(サ) マメノメイガ

(防除のねらい)

ふ化幼虫は莢に食入するので、薬剤の散布適期は着莢期以降である。産卵期間が長い回数回の散布が必要である。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(シ) フキノメイガ

(防除のねらい)

抑制栽培では8月以降秋季にかけて被害を生じることがある。幼虫が莢や茎に食入するのを防ぐため、発生初期の防除に努める。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(ス) ウラナミシジミ

(防除のねらい)

サヤエンドウの項を参考

(セ) ハスモンヨトウ

(防除のねらい)

9～10月に発生が多くなる。幼虫の発育が進むと防除効果が劣るので、幼虫の若齢期に防除を図る。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(ソ) マメハモグリバエ

(防除のねらい)

本種は寄生範囲が広く、薬剤に対する感受性が低いので、早期に発見し、被害の拡大を防止する。キクの項参照。

(耕種的防除法)

- (1) 寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。
- (2) 施設では黄色粘着資材等を利用し、成虫を誘殺する。
- (3) 被害葉を早期に処分する。

(タ) タネバエ

(防除のねらい)

春播きの作型に被害が発生するので、播種時の対策に重点を置く。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(チ) インゲンモグリバエ

(防除のねらい)

夏～秋にかけて突発的に発生する。本種による被害は、幼虫が葉柄や茎の中にもぐり、発芽から本葉3～4枚の時期に加害を受けると枯死する場合が多いことと、その後の茎や葉柄が加害されて折損することである。被害は9月の播種期から11月のビニール被覆終期が主である。防除は播種期の粒剤処理と生育期間に数回の薬剤散布が効果的である。

(耕種的防除法)

寒冷紗や防虫ネットを設置し侵入防止を図る。

(ツ) ハダニ類

(防除のねらい)

抑制栽培では10月頃急増し、葉の黄化、落葉を促すとともに莢の肥大を著しく阻害するので、発生初期の防除に努める。